

第一朗読：使徒たちの宣教(使徒言行録4・32-35)；その金は必要に応じて、おのおのに分配された
答唱詩編(詩編118・1+2、16+17、22+23)；きょうこそ神が造られた日、喜び歌え、この日とともに。
第二朗読：使徒ヨハネの手紙(一ヨハネ5・1-6)；神から生まれた人は皆、世に打ち勝つ
アレルヤ唱：(ヨハネ20・29)；あなたはわたしを見たので信じた。見ないで信じる人は幸い。
福音朗読：ヨハネによる福音(ヨハネ20・19-31)；八日の後、イエスが来られた

今日は「神のいつくしみの主日」と定められています。教皇ヨハネ・パウロ2世が2000年の大聖年に定めたものです。すべてのキリスト者が聖霊の慰めのたまものを豊かに受け、神への愛と隣人への愛を強めて成長することができるように教皇は願いました。その願いにこたえてわたしたちの愛を成長させて行きましょう。

また、今日の別名は伝統的に「白衣(びゃくい)の主日」とも呼ばれてきました。初代教会から復活に洗礼を受けてキリストの死と復活にあずかった人は、今日までキリストの死といのちをうけて新しい人となったしるしとして白い衣をつけることになっておりました。今日はそれを脱ぐ日でしたので「白衣(びゃくい)の主日」と呼ばれたのです。これからのち一人前の信徒として生活していくことを願いまししょう。

イエス・キリストは復活されました。十字架の死に打ち勝ち復活し神の永遠のいのちの中に生きておられるのです。復活したイエスは、今日、かくれひそんでいた弟子たちの真ん中に突然現れ「あなたがたに平和があるように」と言われました。復活したイエスは婦人たちや弟子たちに現れて、いつもともにいることを示し励ましてくれたのでした。

弟子たちは部屋に鍵をかけてユダヤ人が入ってこられないようにしていました。自分たちにもどんな迫害が及ぶかもわからない。町にはイエスを支持していた残党をとらえようとしているヘロデ派の人々やファリサイ派の人々がいるかもしれない。弟子たちはそう思っていたのかもしれませんが。一つの家に閉じこもり中から鍵をかけて災いが過ぎ去るのを待っていました。そこに突然イエスが真ん中に現れたのです。その主を見て弟子たちはとても喜んだとあります。恐れにふるえていた弟子たちにとってイエスの存在はとても力強かったのでしょう。

「あなたがたに平和があるように」とイエスは言います。このことばは意味深いことばです。弟子たちはユダヤ人を恐れて自分たちに危害が加えられないようにじっとしていました。じっとしてすべてが過ぎ去るまで何も無いようにということは平和ではありません。おそれのうちにいるうちは何もなくても心に平和はないのです。平和というのは無関心のうちに過ぎ去ることではないのです。平和とはたとえ迫害されたとしても間違っていることは間違っていると主張し、正しい方向へ導くことで得られるものです。

また、復活のイエスとの出会いは弟子たちにとってゆるしの場合でもあるとも言えます。自分たちがユダヤ人たちにおびえ閉じこもっていたときに復活のイエスが現れ、自分たちを喜びに満たしてくださいます。それによってイエスは復活されたのだとの確信が生まれました。このとき、イエスの死から今まで神を信頼していなかった自分を悔い改めたと思います。あらためて神との和解を弟子たちは果たすことができたのだと思います。そしてイエスは弟子たちに聖霊を授けます。聖霊を受けてそれに突き動かされてこれから弟子たちはイエス・キリストが復活されたことを宣べ伝えて、神の愛とゆるしを説いていきます。

トマスはこの時いませんでした。ほかの弟子たちに復活のイエスに出会ったと聞かされても、見なければ信じないと言います。見なければ信じないという言葉はわたしたちにも一見正当性があるように感じます。しかしわたしたちも世の中のことを本当は見てもいないのに信じていることが多いのです。ほとんどの人はニュースやネットで聞いたことを信じています。実際に見たわけでもないしその場に行ったわけでもないのに信じているのです。トマスはほかの弟子がイエスを見たといったのを聞いて、疑いをもちながら八日ののちにほかの弟子たちと一緒にいました。

イエスを見て、イエスの話しを聞いて、トマスは信じる者になりました。「わたしの主、わたしの神よ」と宣言するほどにトマスは信じる者となりました。イエスはトマスの信仰をよみがえらせてくださったのです。わたしたちがトマスのように「イエスよ、あなたはわたしの主、わたしの神です」と言えるようにイエスは望んでおられるのです。わたしたちも復活のイエスを信じて歩んで行くことができるようこの祭儀の中で祈り求めてまいりましょう。